南瓢記

ル 7
3062
3

南瓢記巻之三

深節

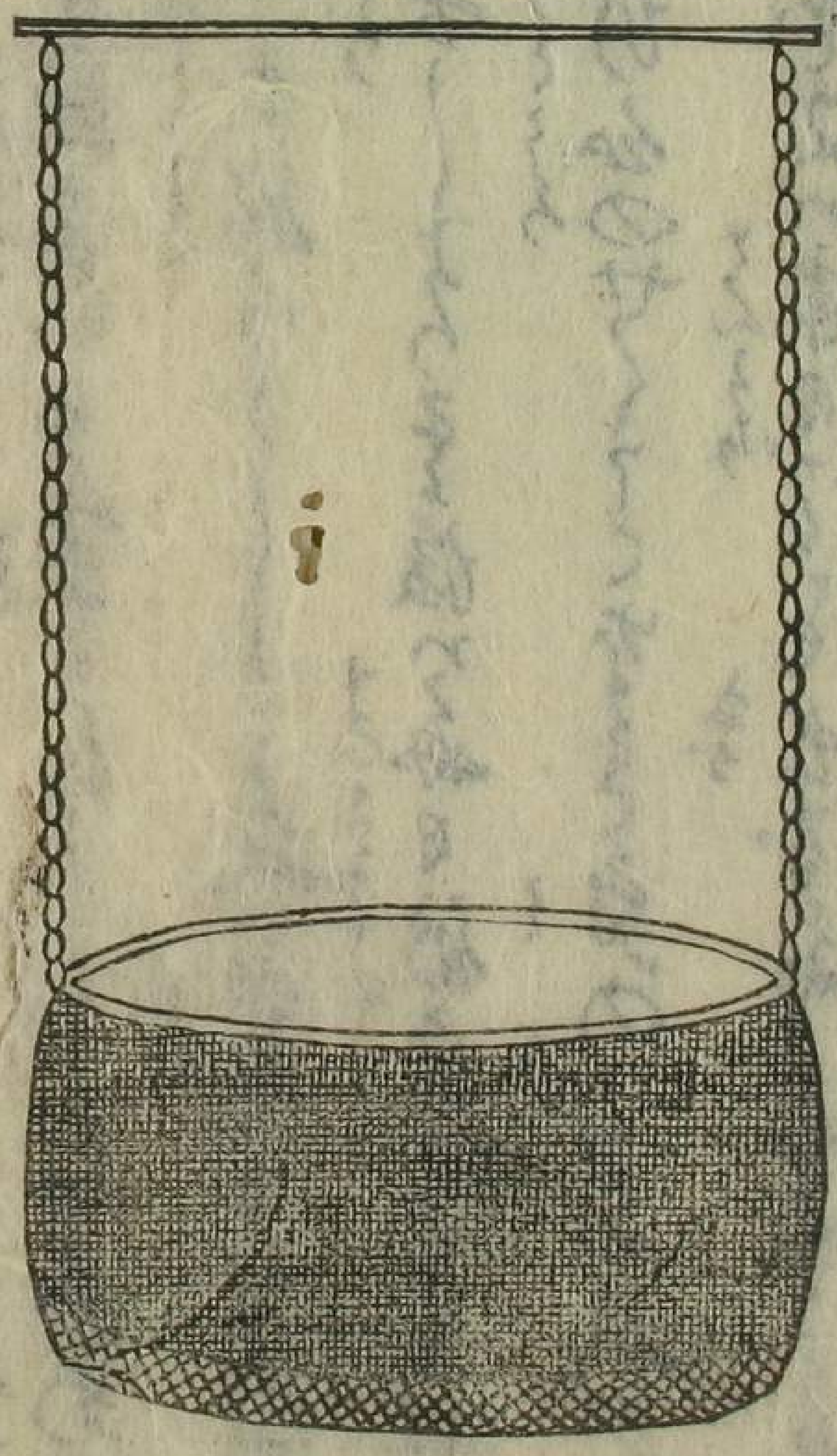
さるふし年此世へとゝろしまりニて月だりよ六人の者ともろふくなろりきにべ一しかもの淋しきてしふだろありあし稀なる星しあまき身のうへにて只明くるを我世への役人のしのもおもひ十人のものども再びたゞ心かひきせ玉へしるのとひのしぬ日とてもなく国王よりののをし富あるを今りや明りやし旅を折そしれる話る折ふし月の深縁含まれ此世まても寺集りの人群集す

七

しかるに富人は元よりさしいあり程を志らざる遠国な
ればかゝる事なれども見物まされるべきとて出たる如く
ろしかるべしとのことにてまよりなだろ住せよめでたく城下
の角又吉町とやらまでもあるところ所よりよう一もえ
なしとはよいつくなく剃染を出来となりけ一二軒
となりに六十斗の老婢男子をそへてゐるあり
身代よ其家は度々移びよゆき人ば老婢はいつも茶るなど
いれて云能丁寧にとてなしなり折ふし老人留主
のせつ出指をどうりしんば老母帰りしてりふは富人はりん坊を

やしき人の子どもは一銘子壱は扇のしもとせず学び様ず
主人を志らりし年源氏いとん其もなしまさ旧よ新るとて
酒屋河の見は拵手能くすしとと見ん家内も十よ六人を
あり風ち一度主并しより玉振は毎日彼方よりも呼びに
来り日に此家へ好ものせくてしなきと身の上なれバいつ
も朝より暮までに又は半日でも居だるなしとどめめく
かりづくに張志よりの巳方出の物語などしおしいう
さとちりしりる亭主は廿才あまりの女房二十七八才よ
て子どもは二人あり惣領は男子なり次は二才の小児なりて世

ぢきに乳房を吸せ寝入らバ二階の裏板より釣
さげありし細き網へ入
但し此網ハ糸にて目こまかくこしらへ幅二尺ほど横一尺余にてよろしき也



網をすこしゆすれバ能よく寝入るまゝ其まゝ成長すれバ寝相上也

中よりつきし虫啖蠅の子乃世話をなく甚だ工夫乃
奇妙之極毎日町々を歩行けれバ家々よりナイくと云
て手招をなすも此よ是ハ立派となる事なるべしと何
気なく差別なく招きし家へはいりけれバ菓子やにて
種々のむしまんぢう様変るを出し殊に風味も
よし其上念入にいくつも喰べてものの外珍しく但しくわしく
あし家出来るまんぢうぐわしハ壱文づゝなりあんハ白砂
精に敷き一寸四方づゝに切しもの一文づゝなりそのまゝよき看
ぐの菓子をあたへまた餘やすそれうちを好まいさせる
因て常に粉紙るい墨筆いつもの家にてもナイくと呼ぶ方

一ツ目の橋ぎはのもの〳〵しひ卅日斗より彼是と御評判
高く往の所に安くたゝる事別して酒屋より芝居迄
僅り十八ツ色より見物せしに何の麁末な縁の座人の
寝言のたとへとて一向りのつかぬ只顔をつくつくしての舞
臺よ江又人がどつと出てせりふしありとてさして
面白さしても見物は大勢迎合りやくて只戌を
とを我一際める此日ぼく驚くしつくに中より頭を旅小
悦がさりのもある芝居のたてると待宿所一場の事
近し海帆の地方布とゑ云取りて芝居で日下人の
見物は

名あつまりて精〳〵の数を振舞し因みも素麺まで出てりし
太りうどんのごとくさうめんを塩煮にかけ汁は
堀くの池とうけしもの也狗あしく思ひたれども人は沢
山に強る取男衆とひさし三日揺りても嘗る所を多くふよう
らぬよのみち涙も毎日く替りぐさに従ふ客ひらく
旅客でどもにあつり後の書に委しく記を

禽獣会

此地町くに獣集し鳥来とけだものの珍しきのひどくなり

家々に豕羊牸牛犬何にても二三疋宛ハ是非とも飼置べし
不残食用に成又糞ハ家毎に要所肝有物なり
是斗ハ食をあたへてかふべし

豕（ぶた）

平生の食物ハ米をたべるなり
糠麸でも与へ一飯かくのごとし

羊（ひつじ）

日中ハなり米と塩とをあたのまぜて
一年に三四度も毛をとり縮に織なり

牸牛（やぎう）

毛色ハ黒て乳出し甚くさき
けだものなり嗅出日しなり

猿（さる）

王城の行程の猿ハ尾の長さ二尺余三尺もあるもの殊
えんしき面ハさして赤くもなし小ざるハ我朝のごとくなり
あり尾長き猿沢山なり

馬（むま）

大きなるものハ耳長さ一尺余もあり背ハ一通りなり
上馬ハ耳長きを用る也耳なきハ荷付むきなり

牛（うし）

角長さ一尺五寸余もあり背ハ小さし
本邦のうしよりハ少しかたちちがひあり

猫（ねこ）

そしくかわることなし

鼠（ねずみ）

おなじくかわりなし

鶏

かならずなくにはあらず時をうたへども定めなし
時刻一つも合ふことなし暖国ゆへと云ふ

鸚

家々に沢山に飼置けり又は世におほしく
鳴時は肉一分あり

鼠

至て多くし何処も年中たくさんなり

蠅

年中おびただしく肉食の器に群がりしは上湯をかけ
てもすなはち出て外へ飛行かず虫のかたちおなし

虵

大きなるものは人家の近沢山にありて人をかむ
ことなし皮をはぎて三味せんに張るなり

象

國王の飼置かれし宮への案内にて見しに一頭
白毛 高サ壱丈四尺 足九寸
鼻長サ三尺 牙 三尺
尾長サ四尺五寸 周九寸 あまり
此外種々の奇獣出せしと云へども記すに遑あらず
甚だ夥し

強勢

人気実情ありて文強勢の事の多し異国は諸国と
只一國にての諸侯有て清朝一統なりとある外国まで

又南国の諺にいはく安南国へ去るに及びて猪首とも
本国と違ひ肉食多ければ風土のならはし之秋国
雑ありかさまにてこれなし此安南国にてハ家々に唐鶏数
多く飼置日用のかてに皆ふしてあげてうまくするしめいく
も日々に禽獣を喰ふに心中まゝ有へきならしに其りくもせつる目
下人への説をとて我方に飼置く家々なとの鶏太道ずし
抜びたるむきゐるを喚延我人の目のまへにまて口ッ足を細
引まてくゝる偏三寸斗もある畜の鶏をとらくし小にも
鉢をうけ置咽の下の毛ほとすどりもむきりとうを直

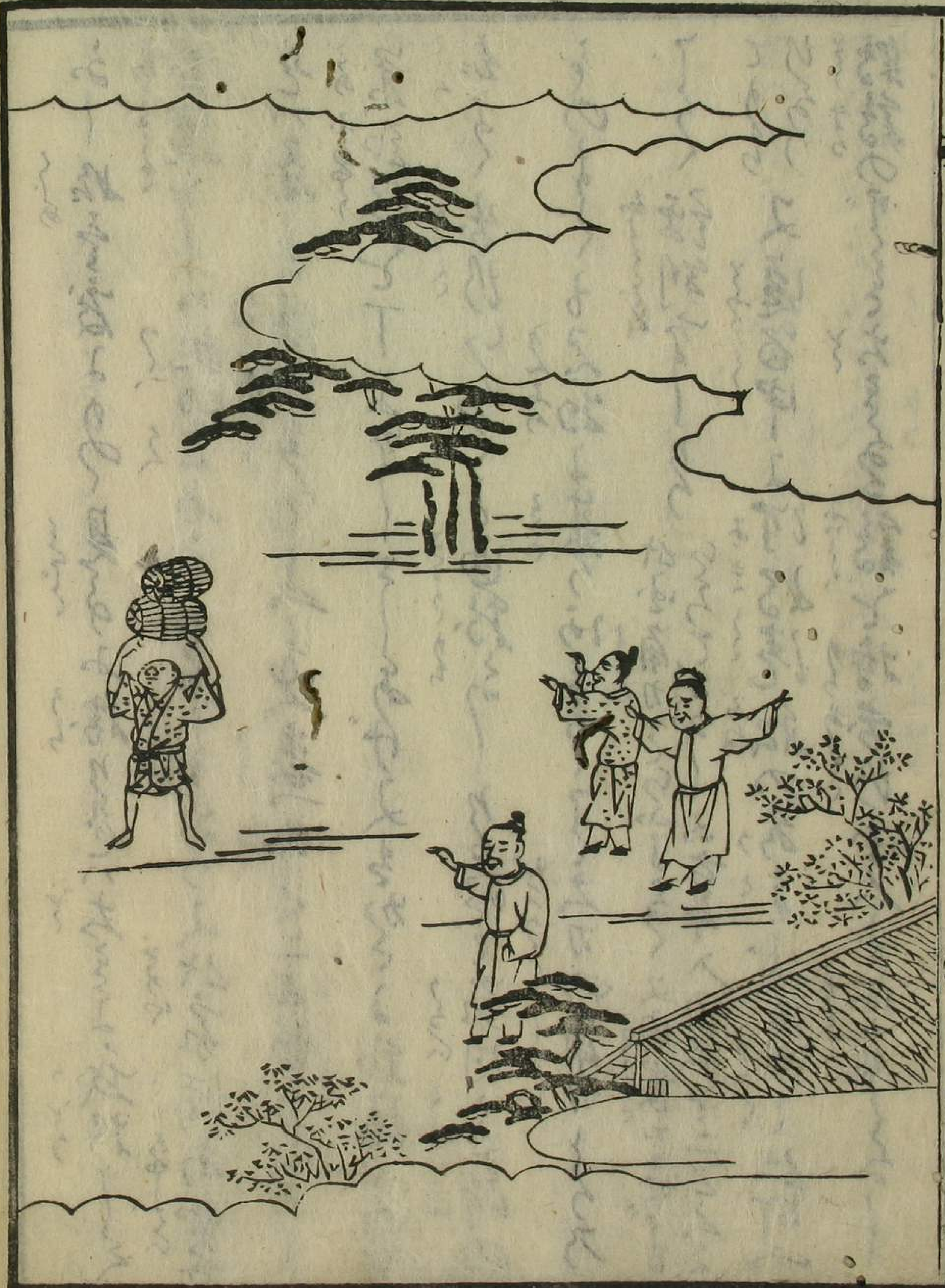
右の料理としてハ鶏ハせうふきに煎ねを見ぬ也せバ
のりかすまで流して血を鉢へとる入酒の肴なれ是吸物
温き飯よりけ堂挽なし あるひハ血を瀬戸物の鍋へ入煮
結へかてまりしを酒のさかなとす鶏のはし足ハ切捨
大釜に湯をたぎらし置未だ死切もせざるをその儘すぐ
に湯へつけて引上毛を抜バ一筋も残らず抜る
をとりてのけなし咽の下より腹へつけ胆にたちまり小
口よりつゞくと細くきり別に瀬戸などに牛蒡のあぶら
をたぎらし置塩少しかげんをなし汁中にて煮結め能

じねんと鶏をのけさまし並酒の肴又ハ飯のさいに突
ふつと目も当られぬしだらなりしさまに先ハ生ながら
ものとくに始てえし時ハ一口も喰ハざりけるがその後ハ羊野牛
なども大猪八郎のごとく鶩鶏も生ながら血をすゝり
又ハ羽ばかりもしらで煮湯へ打込引上てハ毛をとる
種々の料理方家にも見ずとしる給物にする女
子供も食ふるうてしハけしからぬてハ見びろうしれるが
追く代りもをんをもをくる喰ならればさしてふしぎなる事なく
只珍客などへハ始て見る野牛の首をおなくしそのまゝ

首だけを卓机の上にさし其外の魚肉ある吉物とる味
揚なしとならべて振舞をるんと招く料理まておる
なしハ此事にと付合ける其時ハ江みへ逢まで嫁
の町ともあるなくさことに出しに若き男の引組しても
云つよき者言へつゝとゝ人まよりに付方どもの前をまく
足取をまくりて出てむかしハ難気なる事ハ後と立て
一人の男の片手を握り打つきこしよって左道へ投付れバ
のこりぼえ人ハ度にかかるをとも其を先代生の手方
まで腕まくれハ遠者の彼男に頭てハ秋宝の知恵ありとて。

連のものつゞき子をよせ四五人の出入をさんぐくにきやすけり
されば我々ぶんの出人まであきれはてゝし離別ハ勿論させて
したゝかくぢしも身代を何事つかまつても持ざしきものを
かく日々にくとおぢ悉皆十銭ある代物法官公儀へも出入
しかも上より城下のちしぐまでも觸までもまかりしろ
かじとは出人楯ひやさびしくて異国に有る国てなれど
面白きてしをかく一員まではありけてまた武財をかかり乃
酒屋までたまむきでるゝ綻としとなしけるが代房ころ甚
よしやまで連のもの一人も攜手でもなく何かしらんく是文成

なし始末段よりの見すに勝れたりとて捺物しける
志願として机の上にかくしておく又此家酒屋喜左衛門
されば此家より俵物多くとて其妻へ出して二三俵ほどくれ
米を俵をとて小遣しあげて又小歩にかさねて俵をのせ
心よく歩行いろいろと曲持なしけるほど家内はちきの
このますぐも見物に来りけるほどて大力の角力とりの
ごとく評判なしけり此家角力とりをかゝえ又肉食をさせども
てうちりぬけ又近年に河内のあたりから来て若年入の俵を二三人に
又道中に河内の舩の高さものもども日で此町へ
鶏籠のごとき大きなる籠を持歩行出人と何角くるし



合ハなきよりも鶏を持出あ方ども毛元の互ニ争ひ
どづくもある喜嬬打のさまをかつしとさめ蹴合せ
ることより禧を方へ負しるを見ると苦に羨させ絵かくし
なりとハさして殊蜜くも無けど是よなめし打ハさうろく
ことのまてあ方ども血のどろりによつて出入肉食目
び江後く獣料理などハなぐさ手強くで毎是ども公方
にも追従中気治殺しふハ跡も出是まで側あて
つうふハ売人も北ぐまりやさ左之間を向ふより顔をさし
あ論しふ未なおかしく出ひりの立艾も廣東より渡

是ども菜種ふ用るのミならく気治とふつしれ考つん背中
足やいとをすへハ人間のやうま出入思ひにぬかくもえんじ
あん付ませて豕羊の料理を見し時ハ恐ろしく存ぜし
が気治と料祀の感応よ為ひの種を誌しけるこ

時放飼

王城又ハ城下町くにまくまでも二六時中手附にて物本
とおあるさ大家小家とてもさこにくに時斗ハりや番人ハ
その町混りふ昼夜財を走一冊つ門くあれど夜くも明

さるかしたる又家毎に門のしまりもなく都て大戸ハ皆
ミ二階の手すりよりけせんふく留主番時まハ上にあかりお
ろし寝張く宿も貫板かけを隠るゞハ一切なし是
不用心なりしゆへなりけるに過分に盗賊あまくたり
いくとハぬし知らぬところへ一夜のうちに數ケ所へ忍びし旅
宿へと二度まで盗賊來りて宿に居合人の乱暴者なりと
割木をもつて手ごろの所を持追ひかけつけしに其の首を
まで出ぎしや見向きもせず逃げかかるを一人ハ手をもたて
外せうさんと二尺許も隣まで喚ちらし追かけしか

急ぎ二階より劔あるし又ハ飛乗り手子に桙さし逃げ
行方しれぬ處よく皆て手を打ち宿所一ヶ所の極
相合三度まで盗びし其後また来りても首一とつま
さけ竹太き木を本まで用心棒としろ盗人を時今
一夜来るたびに手みその種をこしらへ毎夜地にもせ
ど体されども同じ盗人にてあるしや又ハ外方の
ものとひよおじるる再び来りしかバよくもおも
ひるる又郷下を毎日く盗取らせる其所の人とえしに
却て凡一方又ハ三尺四方なく厚さ寸斗もある板にて首

つなありしろまで胴をおろし又は背中に人のたち
けかごくとあるさ柱を負せまわりしろ人頸を付
胴をおろし或は両足より長き棒をつけ引ずらし或は
しらの許なく胴をおろせしもの断くとつきたるふ人も有
く只見物よぶかくと悪所狂棒を引つりしものなどと
愁世のかゝる者のごとく極く珍しきものまで出人を悦ばれば誠
胴を狂せる人のよし城下までは見苦れ敷し飼の者の蕃
みうけるに深山ある皆日限の延遅あるよし始め方ども
を見物よ来らし円すも右のもの此度幾人もあらし財は

珍敷おもひしあり折々世の中へ穿鑿へも事へ和より覗
ぎ又是は内よりも首さし出し見る中に乱穿鑿も三
味線もあり又逗留中に衣食足二人見法ノ家門へ一宝くは
乞食を乞事にづく聟しぬとあるつし人く卜人の方

服

衣食の二ツハ人間第一の中なく高位高官武百姓よ
至るまで服をゆるく位を定め其分限の格のあるく
異国の宗朝甚例有織古宝の書にくらしく

安南國服

明朝の通りにて袖ハ細くゑ先き三尺斗
長し役引ゴンヲト云もの袴のごとし
此上にエロンをしめる

國王

黒紗綾　黒縮緬　黒緞子　一重帯白や
黒緋巻カンヲト云　金の擲　履白なり
黒鞣木　金王　王子方も同
殿中城下渡御の時ハ歩行にて象の長柄傘をさし
うけ先従ども頭に緋巻をかぶし　青黄赤白の網なり

擲ハ亀甲水牛一角なり丸二寸八斗両側なり

近徒　二寸八斗同し装束なり

手廻り　銀の田楽形盆をさせる　只是ハ只の如く形入
銀　柄まハ金銀の細工也　是外手に皮をいろく一人に壱本づゝ持なり

織物　色ハ紺くもの其ほかしろの方一段高し縁りけるあり
南方にちぢみ持せあり裏までの織物にて結構なり
上に金のござり志るあり

絵　稀の如き縫をかさね生きれ種々織物の
表ひあり又六寸本も木形になしなり

諸侯 装束は青黄赤白の綾織物いろ〱あり
緋裏ゴン国色 エロン白色はなし
是斗国王白なり
不女騎馬まで登城惣門よりする

諸官 装束同断
格式によりて三人供又は人供道具持せ行
何れも騎馬なり乗物城下のるはなし

町人 木綿絹色はよろし
白木綿其文斗も有を取りて裳たりもいけは木綿
ごろけいろくのたるたちかへなかしるは中着し

百姓 木綿にて麻をもちゐる多勢は入むる所町人百姓諸く
役門ともなく男女ともに平常まずくなし 其衣ゴンと

ちくろう

腰物 拵縁く赤てみぶしいろ〱に曲て文のだしあり
又自由なり 鞘を切てへ紫と其家々あり

佛 禅宗多く天台宗も出家の
様々多く紹衣なり

男女座

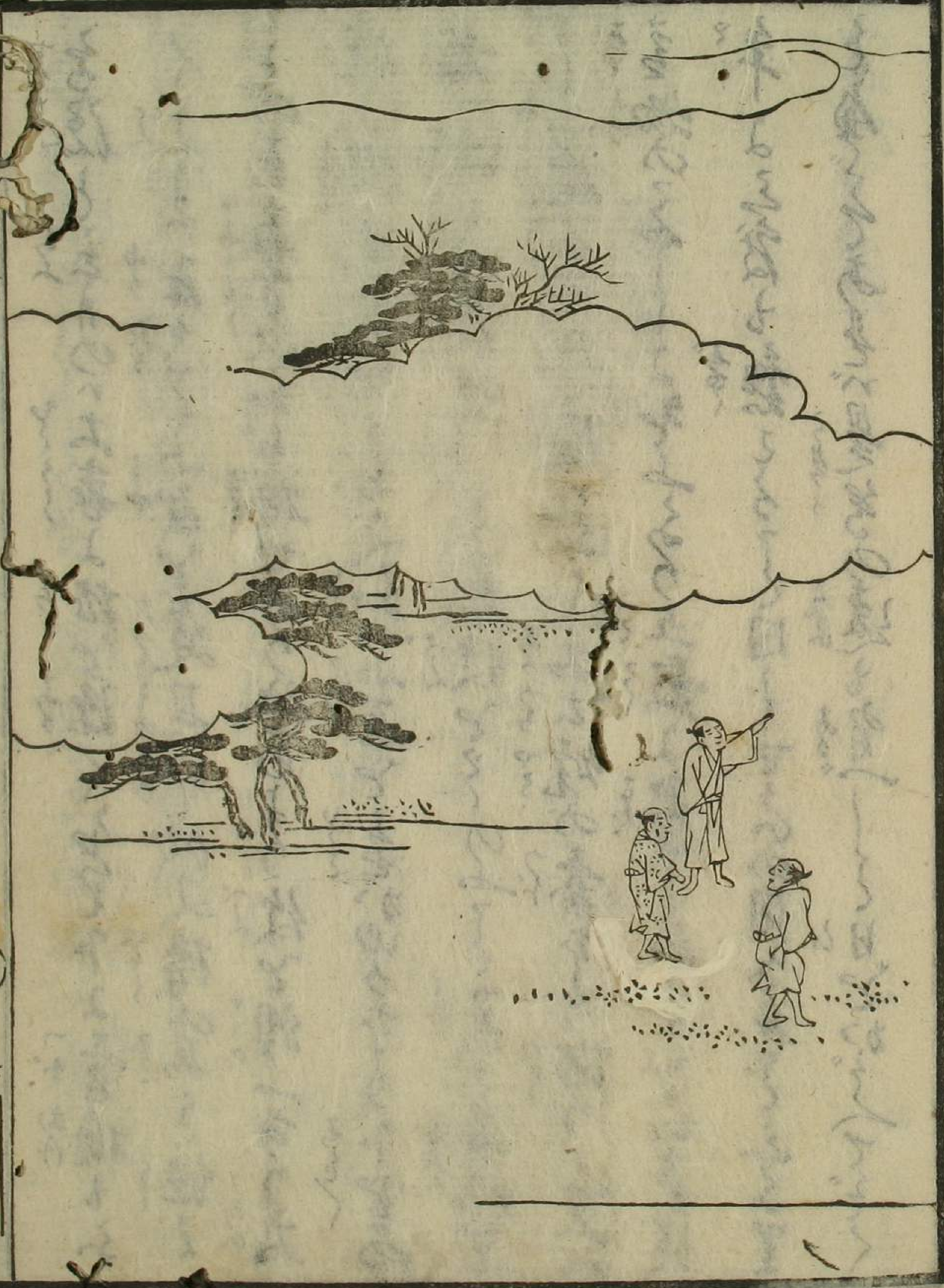
禮は百行の基にして正しきを以て徳とし敬とする也
孔子の孝といふを禮にて家の奥まで奉公もおしへて男
女七八才より手習学問算勘継計うつむさき修

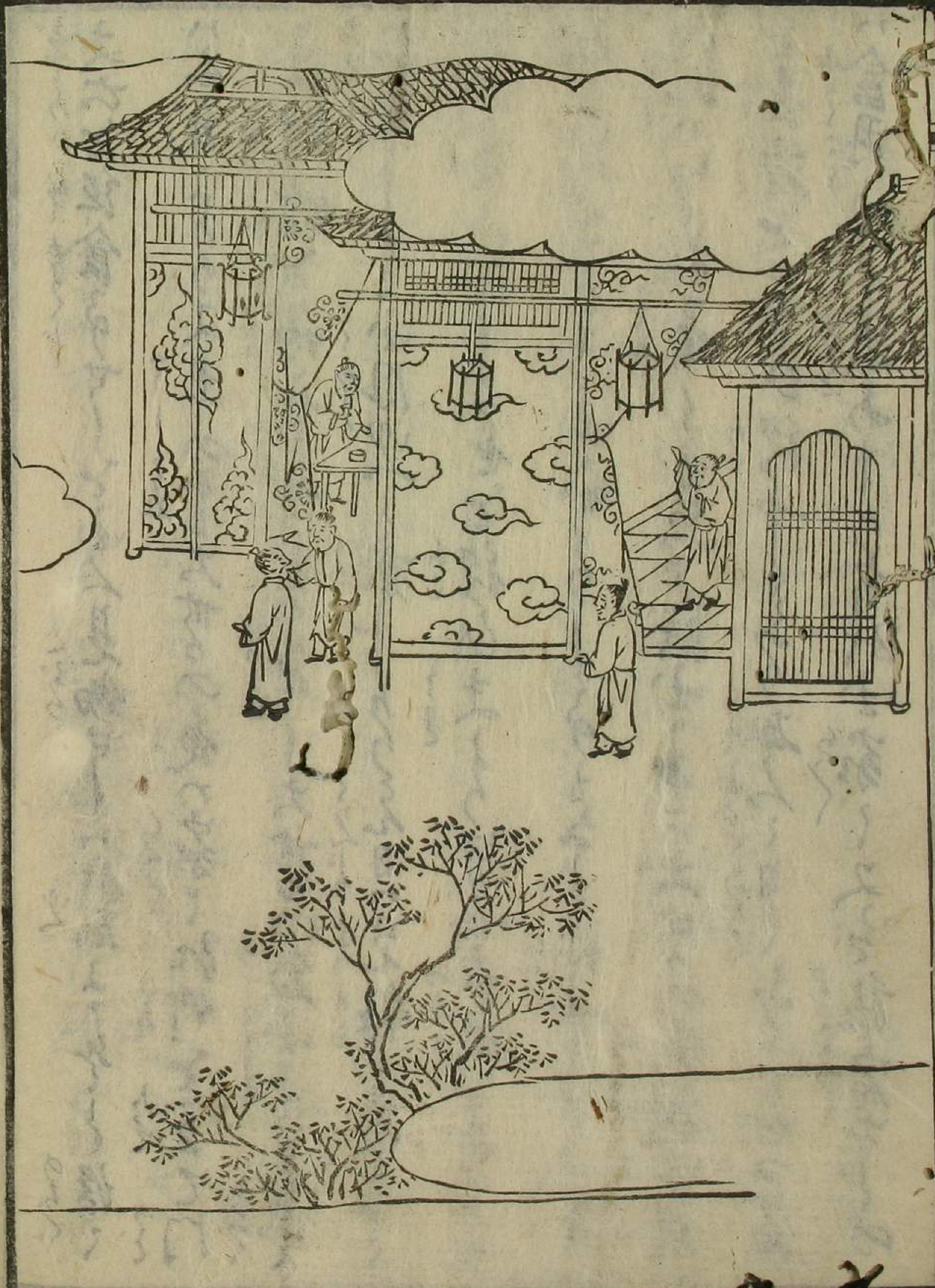
行の自然と礼ある事ゆゑ人の能教ゆべき事ならず
然るに本邦ハ神代より皇の法教正しく異国よりも
君子国と称せしところや猶また安泰にまします政事
ただしき故に民百姓にいたるまで徳を正し敬をなし
孝を尽くさしてかくのし来るなれどもしかるに近世ハ
去の末になりてや男女居宅を並べしてしかるさまありて果
二とえが家々に二階も下までも構うけ並べて
世にようなる貴人または高官の人の事ならでハ只
その任なく猥りに構せバ来るべし人をころしうけへより賤しき

無益なることと称何と申す自他家より見えぬるの辞よろしみゆるを
とも風の一ツにして官人庶人共方しまか合せらるさまと下げ辞
義なさせバ却て其人の行をみだりにして貴人ハ行義う
座なくしてもできぎてまとゐさせけるものもなく適するなし
人をみれバ猿と称し手足を揃へ出し和国のたとへにいふの
字なりのまねをするともいつ足を皆揃へれバ手足を踏のまじ
又ころしかけてよりかかるハ猿も珍しくなりしがよくみれバ
此世の人猿ならしの貴賤なく立たるべき自然にして女と同じ
く目をも継斗ちとつむぞのせつハ只手足を投出し目上を

人のまるといへども手足に拘節なくて物ぐるはしくみゆる
とみえたり只武士などハ猶衣服をあらためて一生にすのを
しひる次立ならびあしてを往の肉まで組合し二度擇ぶ
まへの覚筆ハ从気正しく是ゆゑらのかり平生ハかよふ
のしなく男ハこしうけよりきりり女ハ足をを延しまさハ
居所とド下に立膝を立てつまさきとまへよ寄せらるゝと
我国の人なしハ両手を足へうけいかそうしく跳ぶゆう
みもおもりれども此揃りそれさぶ丈夫よく人形のなく
なし針仕事などするゝも始終膝まで揉をかゞめ

丈六を組食ませしとほ人見物せしハ此故よりて後て
ハ正月よりの又年の暮大晦の夜ハ家ごとに竹を立て門
まで灯燈を灯ふぎゆうなりし太晦の鈞金王より来て
餝りしも此風ひと感じそれ元日ハ先鏡餅をかざりて
を泥羹をなして年を祝ひまづ男女衣服をあらため
れよびむつましてかたりしゆゑなし何ほそても年
の始いひて寿くとひつど此ほかそれ大晦の歳別て酒
と吉詩をとなひ杯かさねて目出たくてかなりぬ
ハ食用にて尚あまりの有此ほか家々又旅宿などの





井溜といふものハ大表に地を深くほりて下に壺桶をふせ
くぼみハ流るゝ小屋を建其中に又櫓の如く組ん
ての主ハ毎月に三度ヅヽ持せあり公事より役を網ふ事の大
概に埋れバ上とらめ又外に小屋を建かゆうたる下業の
者ハ辻に借家の門くりて役をさくの与へて甚だ不礼を
し小便ハたゞに桶にふくみ又肥焼の壺なり溜りて世への
売物のこやしよ起るなり五穀に肥てこやしとなる故
年に三度も熟させて国じせらの内なきごとき里
も毎でてあるいバ是等の遠も有つして日をかゝへてぞく

らしけり

關帝

内外古神宮ハ本国の惣廟にして西ハ筑紫の末々まで
東ハ奥のとうくまで老若男女あゆみをはこび遊ぶ
人間ハ勿論無数までも神徳の仰ぎを我人よく
其るといふの異国まで其の神道の法社もなくなるより
いまのなるまで関帝をあがめて我国よりて内外古神
ちかと敬拝なきこそ其の清明なる関帝の廟所くふ

あり安南にハ廟迎ハなけれども加比丹と號ふ往も
多く嶋々よ關帝の像をかし人掛物よふし神の棚
よまつり前ハ菓子をそなへけ日々燈明のをそなへけ是を拝
し富貴延命子孫長久を祈る事又小児よハ小守
となし首よかけさせ災難のまぬかれんとてがつて是
を信仰せり又本邦の山伏のやうなるものあり是ハ御祷者
と見得て病人来りて頼めハ初より種々の法をつとめし
ら讀経し卓机の上にかざりて医者を頼み円る程ありく
神の棚をとの拝し又ハより口よりて寶をと拝し吉祥御符

よ時をうつり帰へるも沸れる其の後酒飯を出し饗應して
と我国の荒神様よ似るものまで異と本朝神をも敬ふ
ことさしてかもりしてとこ有ふし

關帝之
小像之寫

小児の守よ
つけたり

諸書に出る関帝廟之記

安南琉球女直朝鮮呂宋暹羅其外惣而廟宇を建祭をなし諸夷不許といふ事なし

今代帝燕都におもむく遼東より帝京に至るまで数千里の名城大邑閭閻衆盛處にことごとく廟宇を建て漢将寿亭侯関公祀まつらずといふ事なし人家においても亦私に画像を設け堂にかけて香火を置甚衆に於て飲食必ず祭凡事あればかならず祈禱を官員形に任じて赴くの外宿して廟に謁す甚粛處なり余是を聴んで人に北方のみ然ことをなすにはあらずかくのごとし天下に

遍しと云萬暦壬辰のとし我國倭軍のために侵所の國家かく亡しかば天朝兵を発してこれを救ふ事六七載を連て丁酉のとし天将諸営の兵を合して進て蔚山の塁を攻きびしく利あらずして戊戌正月初四日師を退く遊撃将軍陳寅といふもの有て力戦して賊の丸に中り載て漢都に還り病を調しむ遂ち寓する所の崇礼門外の山麓に於て廟堂一座を創起し神像を設て以て関王をまつる諸将楊経理以下各銀両を出して其費をたすく我国もまたこれを助く廟成て上もまた往て其を観る余遼司に備り諸僚と偕に往て庭に詣り其像を拝し去を観してこれをいふに

赤して重棗のごとし鳳目髯長て腹を過ぎ左右二人矮く
大劔を持侍衛これを周平周倉といふ儼然として生るが如
く是より諸将出入ごとに参拝して東国の為に神助を祈る
といふ賊却て五月十二日大に廟中に登て云く是関王の生
日なりし雷風の異ことも有ざれば則神を祈りし是日天氣清
明午後黒雲四方に起つて大風西北より来り雷雨並び作る頃
くありて止む虎人皆喜て曰王神来て臨りて既にして又鏡
南と安東星州二邑に於て廟を建つ安東は則石を鑿て
像を為と星州土塑両星州甚だ霊異の跡を著すといふ
未だ幾ならずして倭は酉平豊公病で死す倭諸屯悉く皆

撤去此まさに理の測がたき者なり豈偶然ならんや昔苻堅
入て寇す晉の謝安旌節旗鼓を以て蔣子文廟を禱る謝
玄八万の偏師を以て強秦六十萬に勝つ八公山の草木風聲鶴
唳説の如き者似く神助とす況や関王英雄剛大の氣を以
て甚正しきを扶け賊を討つの志萬古を貫て一日の如し死て
滅せず安んぞ神應なきを知んや嗚呼烈武王祠廟前二
の長き竿を立て両旗を掛け一つには協天大帝と書し一つには
威震華夷と書し字大椽の如く風に因て半空に飄揚す遠
近猶仰で両之とみる甚尊む。吾も亦皇朝の追崇する所に甚尊
崇の厚きを見るべきなり

廟之記全文に加ふるに以て諸書よりつゝりて和解して爰に記す

夫婦別

天地開け始しより人間畜類草木まで陰陽雌雄のわかちありて人は夫婦の道定りて雲上の下四の海辺隅々まで神の御代のかしこきはいやましく昇るなし。されども命数の定りはのがれがたく何れ一度は死先に此世をさると會者定離と説玉ひし佛の教へ今生なり安楽かは此世の内男は死して女残りもあり若き女の先立て夫の泣く跡あり偕老同穴と契りしも冥土黄泉の旅におもむくは是非あるまじく思ひよく我人よく知りてゐながら是をかなしみ公家の風儀よく老たるも若きにも夫は離と妻よわかれし夏一夜は赤線しるより源外なし明ぬれば此世の道の程いとふ事を了たる人何かの悪を極めて死せし人とても此世の名跡とて總領を因じふさきるとは縁者も思ひ寄りて文諸士方町人百姓までも遠縁夫の亡き後はなどまで是を着き其の僧のの上へ一日より頭の髪を解ておろし末中を白き紙にてくゝりさげ髪して中陰七日勤ること彼岸にある内にして迄まで忌明せしありまし

としころなり

壺飄記巻之三終